opusdei.org

年間第一週 水曜日 3. 祈りと使徒職

年間第一週 水曜日 3. 祈りと 使徒職 — 人の心は神を愛す るために造られている。主は 一人ひとりとの出会いを望 み、求められる。 — 使徒職 の機会を逃さない。断固し て使徒職の希望を持ち続け る。 — 祈りと使徒職

2024/03/20

年間第1週・水曜日

3. 祈りと使徒職

- 一人の心は神を愛するために造られている。主は一人ひとりとの出会いを望み、求められる。
- 一 使徒職の機会を逃さない。断固と して使徒職の希望を持ち続ける。

一祈りと使徒職

3. 1 人の心は神を愛するために作られている。神は私たち一人ひとりとの個人的な出会いを望み、捜しておられる

前の晩、病人を癒し、集まった群衆に話し、世話をして過ごされた翌日、「朝早くまだ暗いうちにイエノは起きて、シモンの家を発ち、でおいた出て行き、そこで祈って上まられた。シモンとその仲間はんなおられた。シロウは、見つけると『みんとの後を追います』と言った」「。こでれば、今日のミサのマルコ福音書でれば、今日のミサのマルコ福音す。

「みんながあなたを捜していま す1。今日、私たちの時代も、群衆 は神に飢えています。聖アウグスチ ヌスの『告白』の初めの言葉は、今 日もなお有効です。「主よ、あなた はご自分のために私を作られまし た。そのために私の心は、あなたに 憩うまで落ち着きません」²。 人の 心は神を捜し、愛するために作られ ています。また、神はこの出会いを 容易にされます。というのは、神も また、数え切れない恩恵と細やかな 心遣いと愛に満ちた父としての心遣 いをとおして私たち一人ひとりを捜 しておられるからです。私たちが誰 かを自分の目で見たり、新聞で誰か についての記事を読んだり、ラジオ やテレビで誰かについて聞いたりす るときは、確信を持って、いつも次 のように考える事ができます。キリ ストはこの人たちを呼んでおられ る。キリストは彼らのために準備さ れた効果的な恩恵を持っておられま す。このように考えなさい。地上に

は多くの男女がいる。キリストは間違いなくその一人ひとりを呼んでいる。「キリスト者の生活の生活をいておられる。「キリスト者の生活の基本でおられな、使徒的希望の基本でトはおって、キリストであるがある。神の仕事である私を思れるのです。神と彼らの出会いをあるによって容易にすることです。

福音書のこの一節を評して聖ア大類して聖子スは記さいます。「ますによる事による事による事による事にはないます。はないます。はないます。代していまながままで、この人を対したはないます。とれるもの人ののではないませんがある。とないませんがある。とないないないないが過ぎましたが過ぎましたが過ぎましたが過ぎましたが過ぎましたが過ぎましたが過ぎましたが過ぎましたが過ぎましたが過ぎましたがある。

して、日常生活の中にイエスを見出 すことを教えるために、また、すべ ての人が近づきやすいように、主の 聖なる人性をとおして私たちが聖三 位に至ることができるように、他の 人と同じように勤勉に働いたナザレ の隠れた生活を黙想しました。聖ペ トロのように私たちもまた、祈りの 中でイエスに会いに行きます。…イ エスとの個人的な会話のうちに…そ して、みんながあなたを捜していま す … 親戚、友人、同僚、私たちが 道で会うすべての人があなたを見つ けるように、主よ、助けてくださ い、と言います。主よ、あなたは彼 らが必要としている方です。快活な 生活の模範をとおして、また、私た ちの言葉で心を動かすことで主であ るあなたを人々にどのように知らせ ればよいかをお教えください。

3. 2 使徒職を行うためにどんな機会も無駄にしてはいけない。使徒的希望を強めてください

第2次世界大戦中に破壊されたドイ ツの小さな村のある教会には、大変 古い十字架があり、土地の人々はと ても愛着をもっていました。人々が 教会を再建するためにやって来た 時、村人は荒れ跡に両腕のないキリ ストの立派な十字架像を見つけまし た。人々はそれをどうしたら良いの かわかりませんでした。ある人々は 腕を修理して同じ十字架を据えるこ とに賛成しました。他の人々は最初 の十字架の複製を作ってもらう方が 良いと考えました。結局、慎重に考 えた末に、祭壇の背後の正面にいつ もあった像を今までどおりに戻すこ とに決めました。ただ、あなたがた は私の両腕であるという碑銘をつけ て。それは今も祭壇の上に見られま すっ。

私たちがこの世における神の両腕なのです。神ご自身が人々を必要とされ、意図的に計画に入れておられます。健康を取り戻させてくれる医者

を見出せないでいる、この病んだ世 界にもっと近づくために、神は私た ちをこの世にお遣わしになるので す。神は私たち一人ひとりをご存じ で、救いと永遠の命の言葉を見出す のは神においてだけであるという確 かな希望をもって、多くの人々に神 について話すのです。だから、怠り や安楽に負けたり、疲労や人間的な 尊敬を求めたりして、神について話 す機会を逃がしてはいけません。そ れは、日々普通に起こる事柄の中に あるかも知れません。例えば、私た ちが誰かのために行なったり、誰か が私たちのためにしてくださったり といった、小さな奉仕の行為や新し い事柄についての批評の中に、で す。病気や身内の死というような特 別の出来事も、こうした機会になる はずです。「仕事や休暇での国際的 な活動のために外国を旅行する人 は、どこに行ってもキリストの移動 的使者であることを心に留めておく べきであり、実際にそのように振舞

うべきです」。教皇ヨハネ・パウロニ世は、信徒への最初のメッセージで、すべての人々に対いにが良くてもまって、が良くてもあらるようで、あらいの子とにつる手したがたりまするといるの子ともは、あらいともならがたがあるに説きまたがあるがたないであるといるであるといるの世界における聖性と復言れるといるの世界であるだろう」。と言れました。

して「人がいません」。、主について誰も私に話してくれる人がいするようになる。ないはそのようにするもいなった誰も私を導いてくれなった任のと言うことがなります。時宜を得た話した人の信仰を再び堅固になります。時宜を関している。 一冊の本、ある適切な明言、当に正はまり豊かな模範になります。 は実り豊かな模範になります。

問いかけてみましょう。ゆるしの秘跡に行くことや形成や神の教義に関する知識を向上させる手段に与るように励ましながら、私たちの友人のために祈るべきです。

3. 3 祈りと使徒職

神は、私たちが世の只中、日常生活 で贖いの什事を行う道具であること を望んでいます。しかし、私たちが 信仰生活を大切にしなければ、ま た、祈りでキリストとの個人的なつ ながりを本当に持たなければ、どう して神の良い道具であることができ るでしょうか。「盲人が盲人の道案 内をすることができるでしょうか。 二人とも穴に落ち込みはしないで しょうか | 11。 使徒職はキリストへ の愛の実りです。私たちが光を与え るために必要な光、人々に教えなけ ればならない真理、伝えなければな らない命、それはキリストです。こ のことは、私たちが祈りをとおして

神に結ばれている男女であることによってのみできることでしょう。かなりたくさんの使徒職活動の只中で、主が朝早くまだ暗いうちに起きて、父なる神に話しかけ、人々のために尽くす一日を御父にお委ねになるのを見ると感動します。

私たちはイエスを真似なければなり ません。いつも朗らかでいたり、神 が私たちの傍に置かれた人々を喜ん で迎え、理解するようになったりす るのは、この祈りの中、つまりイエ スと話す中なのです。祈りがなけれ ば、キリスト者は根のない植物のよ うになるでしょう。そんな植物はす ぐに枯れ、実をつけることはできま せん。一生を通して私たちは頻繁に 神と話すことができるし、また、そ うしなければなりません。神は遠く におられるのではありません。私た ちの近くに、すぐ傍におられます。 神はいつも私たちの話すことを聞い ておられますが、見知らぬ者として

ではなく、匿名でなく一対一の付きを合いに専心するなら、特に望みによるなら、神の望かにないます。神の程度に対して、かなりを開くる自然のの会話のの生は超れたとながよりませんがあるという。実に、なたのもはないでもまずはあると言うによってはない。まないでもまずはない。とができまずはないでもない。というにはないできまずはない。というにはないできまずはない。というにはないではないできまずによっているというによっているといっというによっているというによっているというによっているというによっているというによっているというによっているというによっているというによっているというによっているというによっているというによっていることにはなっていることによっていることにはないるにはなっていることにはなっていることにはなっていることにはなるにはなっているにはなっている

 りやすい状態のままにしておくことなく、それを取り除く努力をすることを決心しなければなりません。私たちは頻繁に意向を正し、私たちの全存在と行いを神に向ける必要があります。

私たちには、個人的祈りに進歩して いないという落胆と闘わなければな らない時があるかもしれません。も しその時が訪れたら、それは、悪魔 が私たちに祈ることを止めさせるの が容易になる時です。ですから、た とえ疲れて祈りに注意を向けること ができなくても、愛情が全く感じら れなくても、望まないのにかなり気 が散っていることに気がついたとし ても、決して祈りを止めてはいけま せん。祈りは生活の頼みの綱であ り、どの使徒職をするにも何ものに も代えがたい条件となるものです。

この祈りの終わりに、内的生活の素 晴らしい先生である聖ヨセフの力強 い取次ぎを願いましょう。長年、イイスの傍で生活した聖ヨセフに、で生活した聖ヨセスとの日々、スローでは、では、では、では、ないのは、はいったが、がいったが、とがいったが、という。 い取次ぎを願いまして、といったが、という。 になったが、という。 になったが、という。 になったが、という。 になったが、という。 になったが、という。 になったが、という。 になったが、という。

¹マルコ1・29-39

² 聖アウグスチヌス 『告白』1,1,1

³ 聖ホセマリア・エスクリバー 『鍛』13

⁴ St Augustine, Sermon 87,13

⁵ F.Fernandez, Lukewarmness-The Devil in Disguise 参照

- ⁶ 第二バチカン公会議 信徒使徒職に 関する教令7
- ⁷ ニテモテ4・2
- ⁸ John.Paul I Address,27 August 1978
- ⁹ ヨハネ 5・7
- ¹⁰ Cardinal J.H.Newman, The Religious Sense
- 11 ルカ6・39
- ¹² 聖ホセマリア・エスクリバー 『道』108 参照

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/TO-I-sui/ (2025/11/21)